

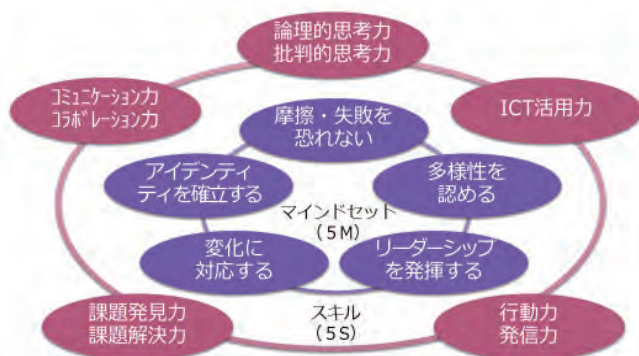
名城大学附属高等学校

高大協働による愛知県産業を基盤にした グローバルビジネス課題の探究

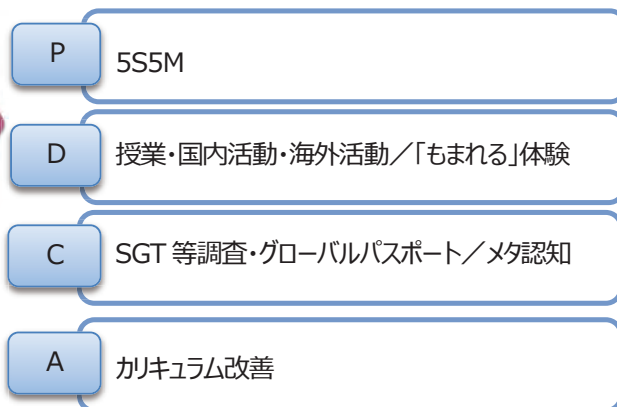
【構想の概要】

愛知県産業から派生する様々な課題について、高大・産学協働の探究活動を行う。授業と課外活動とを融合させたサービスラーニング等を通して、スキルとマインドセットを育成し、グローバルシチズンシップを獲得させる。評価・検証には、ルーブリック等を用いたパフォーマンス評価、定期的なアンケートによる統計学的手法を用いる。

グローバルシチズンシップを獲得するために
必要なスキルとマインドセット（5S5M）の相乗効果



本校でのPDCAサイクル



教科	科目	標準 単 位	第1学年		第2学年		第3学年	
			一般	国際	一般	国際	一般	国際
					文系	文系	文系	文系
国語	国語総合	4	4	4				
	現代文B	4			3	2	3	3
	古典B	4			3	2	4	4
地理歴史	世界史A	2	2	2				
	世界史B	4			3	3	4	3
	日本史A	2	2	2				
公民	日本史B	4			3		4	
	地歴演習						2	
	倫理	2					2	2
数学	政治・経済	2			2	2		
	数学I	3	3	3				
	数学II	4			4			
理科	数学III	5						
	数学A	2	2	2				
	数学B	2			2			
物理基礎	数学演習A				2	4	2	
	数学演習B							
	物理基礎	2	2					2
化学基礎	物理	4						
	化学基礎	2			2	2		
	化学	4						
生物基礎	生物基礎	2	2	2				
	生物	4						
	理科課題研究	1						
理科演習	理科演習						3	

教科	科目	標準 単 位	第1学年		第2学年		第3学年	
			一般	国際	一般	国際	一般	国際
					文系	文系	文系	文系
保健体育	体育	7~8	2	2	2	2	3	3
	保健	2	1	1	1	1		
	音楽I	2			2	2		
芸術	美術I	2			2	2		
	書道I	2			2	2		
外国語	コミュニケーション英語I	3	3	4				
	コミュニケーション英語II	4			3	4		
	コミュニケーション英語III	4					3	4
家庭情報	英語表現I	2	3	3				
	英語表現II	4			2	3	3	4
	家庭基礎	2	2	2				
総合的な学習の時間	社会と情報	2	2	☆				
	国際教養				2		2	
	イングリッシュプレゼンテーション			2	2		2	
グローバル・イノベーション	G7サミットスタディ			☆2				
	科学英語							
	スーパースタイルI							
スーパースタイルII	スーパースタイルII							
	スーパースタイルIII							
	数理探究基礎							
探究基礎	数理探究							
	探究基礎		1					
	多文化共生			2				
グローバル概論	グローバル概論				2			
	課題探究					4	2	2
	特別活動							
ホームルー・ム活動	ホームルー・ム活動	3	1	1	1	1	1	1
	合計		32	34	32	34	32	34

SGHとSSH

本校は普通科と総合学科全 53 クラス、1,984 名の生徒を有する。SGH 事業は普通科国際クラスを主対象、一般進学クラス第 1 学年・一般進学クラス第 2 学年文系選択・第 3 学年文系選択の課題探究選択者を準対象とし、SSH 事業の対象生徒と分けている。

		＜ クラス数 ＞		
		1 年	2 年	3 年
普通科	特別進学クラス	3	3	4
	スーパーサイエンスクラス	1	1	1
	一般進学クラス	8	4	5
	理系 文系		3	3
	国際クラス	1	1	1

SGH と SSH は、文系と理数系に分かれ探究的学習の開発を担うが、分掌「教育開発」を中心に、連携して探究手法や成果検証等を検討し、情報交換を行うことで、全校的な探究的学習へと繋げている。

学校設定教科の設定

課題研究を進める科目を「総合的な学習の時間」に、課題研究を支える科目を学校設定教科の「グローバル」に設置している。一方で既存教科の授業時間を確保・充実するため、主対象クラスでは 4 単位の増単を行った。

授業と課外活動の連携、その段階的設計

本校では、探究活動を柱として、各取り組みが 3 年間を通して一連の流れとなるよう設計している。具体的には、「総合的な学習の時間」と「グローバル」を探究活動の軸としながら、国内外での課外活動で体験的に学びを深め、その成果を校内外の研究発表会において発表し、フィードバックするという形である。各取り組みは、相互に補完するよう構成している。(図 1)

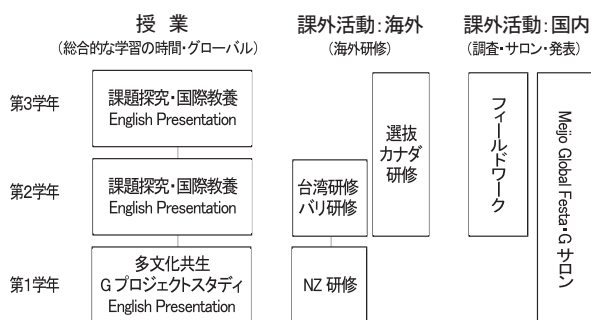


図 1 3 年間の取り組みの流れと連携

(1) 授業：総合的な学習の時間・グローバル教科

「総合的な学習の時間」や「グローバル」は、相互に連動しながら専任教諭によるチームティーチングで担当する。さらに適宜「社会」や「英語」、外部とも連携して進めている。「総合的な学習の時間」及び「グローバル」の授業は、グローバル教科主任及び教育開発副部長、国際クラス担任団が授業開発の中核を担うが、担当する教員は 7 教科 26 名に渡っており、科目毎に担当者会議を開催して対応する。

この中でも中心的な授業となる「課題探究」は、第 2、3 学年合同で行い、ゼミ形式で行っている。

これらの科目を基盤として国内外の課外活動を行うとともに、国内外の課外活動での経験により、科目における学習の深化を図っている。

(2) 課外活動：海外（海外研修）

SGH 事業では 3 つの研修を実施している。

1 つ目は、1 年時に実施するニュージーランド研修で、エスニックダイバーシティや日系企業のマーケティング戦略、ソーシャルビジネス等についての講義を受ける。2 つ目は 2 年時に選択制で実施する台湾もしくはインドネシアバリ州を研修で、現地でグループでの調査活動・現地生徒との議論等を行う。3 つ目は、SGH 対象生徒から選抜のうえ行うカナダ研修である。

全ての研修は、事前に課題を設定して、大学教員からの指導等を含めて学習する。現地では設定した課題を元に学習を進め、事後はその成果を各自の研究にフィードバックする。これらの研修は短い期間ではあっても探究のエッセンスを体感できる機会となり、生徒の様々な学習に対する意欲を高めている。

(3) 課外活動：国内（調査・G サロン・発表等）

授業と海外での活動と連動して、国内でもフィールドワークや G サロン、Meijo Global Festa (以下、MGF)、研究発表会等を開催している。

フィールドワークは、第 2、3 学年ではゼミを基本単位として各自の研究課題の調査を行う。2017 年度は県内の様々な企業・団体の協力により 67 箇所を実施した。

「G サロン」は、月に 1 度、土曜日に開催する

ワークショップ型の学習機会である。大学教員、起業家、国際機関職員等、様々な講師を招聘し、全校生徒・保護者・近隣の生徒たちが自由参加で集って話し合う。

その他、本校生徒のみが参加する生徒研究発表会や、名城大学のキャンパスで中部圏の高等学校や外国人学校を招いて開催する MGF を開催している。

国内での課外活動は、研究課題を「海外の問題」で終わらせることなく、日本がどう関わるのか、どのように関わっている人がいるのか等を知り、世界の問題を日本に置き換えて検討し、グローバルとローカルを往還する視座を身に付ける機会となっている。また、これらの活動は社会との接点を持つきっかけともなっており、国内での課外活動をきっかけに活動団体を立ち上げたり、参加したりする生徒が増えてきている。

生徒の変容をどうつかむか

SGH 事業の取り組みの効果に関しては、生徒の変容を中心に検証している。

生徒の変容は、対象生徒全員にスーパーグローバルテスト（以下、SGT）を実施して測定している。

また、SGT を補完するものとして、「5S5M 等における向上実感」、「向上実感の要因」、「各因子における目標設定の変更状況と理由」、「次年度の活動意欲」等に関する各調査を実施し、「リフレクションシート」と「グローバルパスポート」での記載を使って、事業の評価とした。

SGT は、5S5M の 10 の因子とグローバルなキャリア設計に関する因子を元に設計した 46 項目からなるアンケートで、4 月と 1 月に実施している。2017 年度末の第 3 学年の結果を見ると、以下の結果が見られた。（図 2）。

- ① 1 月の各因子の平均は 4.3 ポイントである。前年の 1 月と比較すると全ての因子のポイントが上昇しており、「思考力（+ 0.4）」、「ICT 活用能力（+ 0.3）」、「発見・解決（+ 0.5）」、「リーダーシップ（+ 0.5）」において有意差が認められた。（ $p < 0.05$ ）
- ② 入学時の 4 月から比較すると、平均して 0.8 ポイント上昇しており、全ての因子で有意差がみられた。特に「思考力（+ 1.1）」、「ICT（+ 1.3）」、「発見・解決（+ 1.0）」が大きく

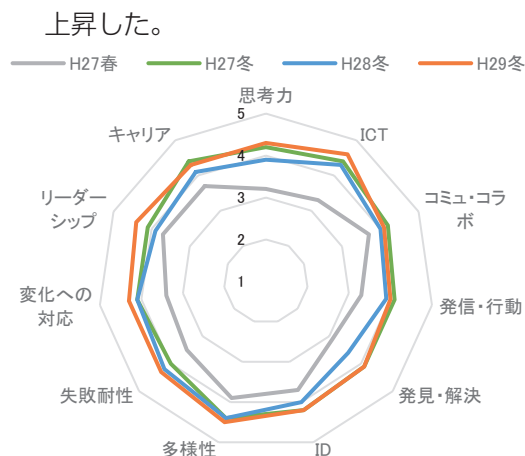


図2 国際クラス第3学年 SGT 結果の変化

このような達成度と同様に、向上実感とその要因についても分析を進めている。向上実感を持っている生徒のうち、どの取り組みが向上実感に影響したかと問う調査では、以下のような結果が見られ（図3）、探究型授業と海外研修の効果が大きいことがわかった。

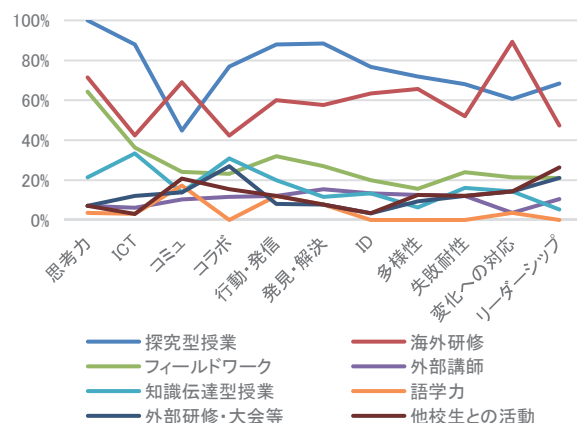


図3 国際クラス第3学年 各因子の向上実感の要因

この調査は、8つの選択肢を設定しているが、それぞれの選択肢は不可分の部分もある。しかし、それらが総じて生徒のスキルとマインドセットの向上につながっている様子が見受けられ、それぞれの取り組みに一定の効果があつたと考える。

また、本校ではグローバルパスポート制度を導入している。グローバルパスポートとは、SGH 事業に関する各自の様々な取り組みの実績・成果を記録するポートフォリオである。記録する実績や成果は、付与されたマイル数によって換算され、蓄積する。

生徒のマインドセットやメタ認知を重視して事業設計するなかで、SGT やリフレクションシート、グローバルパスポート等、生徒自身が見える形での重層的な振り返りが必要だと考える。

G サロンと MGF を通した学びの形

本校の特徴的な SGH 事業には、G サロンと MGF がある。両事業とも、名城大学との連携と世代や学校の枠を越えた多様な人々による議論、生徒が運営や進行に参加することが特徴である。

特に MGF では、名城大学文系全 6 学部との連携のもと中部圏の各校が集い、フォーラム部門とプレゼンテーション部門を開催している。大学の教授陣は、フォーラム部門では事前課題の設定と議論への助言をするとともに、プレゼンテーション部門では発表に対する講評を行う。

昨年度の MGF は、SGH 指定校やブラジル人学校を含め、12 校が参加し、参加生徒は延べ 142 名、聴講生徒を含めると 250 名以上の参加となり、年々拡大してきている。

【MGF2017 の内容】

●フォーラム部門（ ）内は連携学部

- 分科会 A 「多文化共生の課題と展望」(法学部)
- 分科会 B 「国民国家とは何か」(経営学部)
- 分科会 C 「日本企業の海外展開からグローバル化を考える」(経済学部)
- 分科会 D 「インバウンドツーリズムと地域」(外国語学部)
- 分科会 E 「多文化共生と言語」(人間学部)
- 分科会 F 「グローバル時代の名古屋の魅力を考える」(都市情報学部)

●プレゼンテーション部門

- A パート 参加各高校による探究活動発表
- B パート フォーラム部門の成果発表

本校での課題研究活動の到達目標とは、探究活動で得た知識・技能・経験・マインドセット等を結び付け、あらゆる場面において応用できるようになることである。

G サロン・MGF の活動を通して、生徒たちは探

究自体が即ち学問であることを知り、様々な人との共同作業を通して自分の知識や技能等を連関させ活用しようとする。

この効果を SGT で検証したところ、運営・進行を担った実行委員生徒と参加生徒、不参加生徒で次のような結果が見られた。

- ・実行委員生徒：「思考力 (+ 0.4)」、「コミュ・コラボ (+ 0.5)」、「リーダーシップ (+ 0.4)」に有意差があり ($p < 0.05$)
- ・参加生徒：「多様性 (- 0.3)」に有意差あり。
- ・不参加生徒：有意差なし。

意欲の高い生徒が実行委員となりやすいという事実はあるものの、MGF 以前での SGT 結果には他の生徒とそれほど差は見られない。数か月間にわたる準備期間と当日の活動が彼らの自信となった様子が見える。また、参加生徒のマイナスとなった因子については今後の変容を注視する必要があるが、「MGF を通して、自分の知識が少なく、閉鎖的になっていたと感じた」というリフレクションシートの記載から見て取れるように、MGF は生徒にとって「もまれる」経験であり、自分自身の状況を客観視する機会となっている。

これらの結果を踏まえ、今後もさらに G サロンや MGF を継続し、その深化・普及に努め、生徒の向上実感に結びつくよう工夫する。

また、他校への普及活動の一環として、本年度から「MGF を通したこれからの探究型学習についての教員研究会」を開催する。

